



三、光華門の占領、城内進入

12月9日私曉、第九師団の先頭部隊は相前後して、南京城壁前クリークの線に進出し、つぎのように総攻撃を準備した。

歩兵第六旅団——中山門正面。

歩兵第三十五聯隊は中山門東南方の陸軍兵營付近、中山門より進入。

歩兵第七聯隊は工兵学校前面、中山門、光華門間の破壊口より進入。

歩兵第十八旅団——光華門、通済門正面。

歩兵第三十六聯隊は光華門を占領。

歩兵第十九聯隊は武定門正面から転進して歩兵第三十六聯隊を増援、同聯隊を超越して光華門より進入。

当時、師団に協力する戦車第五大隊、軍砲兵部隊は鋭意追及中であつたが、いち早く光華門正面に進出した歩兵第三十六聯隊は、9日以來突に三十六時間におよぶ激戦の末、10日午後5時頃、決死隊によつて光華門の城壁を占領し、「一番乗り」を果たした。

▲光華門の占領 (「教習聯隊史」、官部一三著「風雲南京城」に拠る) 当時の光華門は、門扉を堅く閉じ、外濠は幅約三五メートル、深さ約四メートル、城壁の高さ約十三メートル、門に通じる道路は、対戦車壕ならびに五条の拒馬をもつて阻絶し、道路の両側は水際に至るまで鉄条網をもつて固め、城門の両側、城壁には十数箇の機関銃眼を設けて、堅固に守備していた。

聯隊長は、まず配風山砲二門に城門の破壊

射撃を命じたが、携行弾薬が少なく、門扉の一部を破壊したのみで、突撃路を開設するには至らなかつた。そこで、小坂工兵大尉の指揮する決死隊は、軽装甲車と伊藤大隊の支援射撃の下に、拒馬を排除して肉迫し、二回にわたりの爆破を敢行したが、爆薬量が少なくて効果があがらず、さらに20時頃、爆薬量を増加して行なつたが、完全な突撃路を開くことはできなかった。

この間、雨花台方向からの敵の砲撃が盛んとなり、わが軍の人馬の死傷も多くなつたが、右第一線の第一大隊は工兵の作業を支援して光華門に対する突撃を準備し、左第一線の第二大隊は、通済門に対する攻撃を準備し、予備隊の第三大隊は、防空学校の西南方に対し警備しつつ夜を徹した。

9日午後から夜にかけて、敵兵の逆襲、夜襲が盛んとなり、その上に敗残兵が各方面から光華門に入ろうとして四辺に充満し、敵の銃砲火も激しくなつた。さらに、雨花台及び紫金山方向からの敵砲兵の集中射撃のため、わが軍の損害は更に増加した。

七糶橋の旅団司令部と聯隊との連絡は杜絶している敗残兵のため、命令受領者や補修作業の通信兵も相次いで死傷する状態であつた。旅団副官武田大尉が山砲弾薬五〇〇発と機関銃弾を、軽装甲車を使用して、中間の敵陣地を突破して補給し、旅団司令部との連絡もとれるようになった。

入を命じた。 15時、直接照準によるツルベ射ちの破壊射撃によつて、城門の上部、土囊が漸次崩れ落ちて、急な斜面ができあがり、17時やや前に辛うじて突撃路が開設された。

この時、敵の重迫砲弾十数発が、観測所、戦闘指揮所付近に集中し、屋根は崩れ耳は聞こえず、目は眩み、漆々たる爆煙に包まれたのであるが、敵の砲撃がわが戦闘指揮所に集中している好機に乘じ、伊藤大隊長は「独断突入」を命じ、第一中隊、次いで第四中隊が突入を敢行して、光華門に日章旗を打ち立てた。

しかしながら、城門内に突入した大隊主力は、敵の射撃、手榴弾戦、敵の逆襲など、肉弾相撃の悲惨な戦況となつたが、重砲大隊や友軍飛行機の爆撃に支援されて、占領地を死守し、12日14時頃、第二大隊の救援・弾薬・食糧も補給され、将兵の志気大いに上つた。

夜半頃より、敵の銃声、手榴弾投擲も次第に減少し、13日4時、まったく聞こえなくなつた。偵察の結果、敵の大部隊が退却していることが判明したので、城壁上に躍りあがり「一番乗り」を喜びあつた。

後日、聯隊は、軍司令部から感状を授与され、陣頭突入した山際少尉は、官殿下から軍刀を賜つた。本戦闘においては戦死三七五名、負傷五四六名の尊い犠牲をほらつたのである。(ゴシツク・筆者)

▼野戦重砲による城壁破壊射撃 (独立野戦重砲兵第十五聯隊第二大隊長、佐々木孟久氏、31期、現住所、福島県双葉郡双葉町) 私の部隊は、口径十・五センチ加農砲の軍砲兵で、9月27日以来、上海の戦闘、南京に向かう追撃作戦に参加し、12月9日、南京城外に進出して紅土山一安五管に陣地を占領し、南京攻撃を支援した。

設(これらは地図に朱書きされていた) われわれ軍砲兵は、これらの目標を避けて紫金山、天文台の敵陣地、観測所に射撃を指向した。当時、城外の戦場付近には住民は一人も見当たらなかつた。

11、12日、城壁の破壊射撃をおこなつたが、なかなか破壊できず、十加の最大射程は一五、〇〇〇メートルであるが、陣地を推進して、約二、四〇〇メートルの射距離で正確な射撃を行った。また、第四中隊は城外飛行場に陣地を占領し、脇坂部隊の攻撃に協力した。第九師団は山砲編成のため、城壁の破壊は不可能に近かつたからである。

11、12日の軍砲兵(十五榴、十加、十五加、二十四榴)の猛射により、光華門東側に傾斜45度の突撃路三条を開設し、脇坂部隊は13日未明、城門右側の破壊斜面をよじ登り、南京一番乗りを果たした。

軍砲兵隊は南京占領後、城内の軍官学校に駐屯した。日本軍入城後は領事館付近に収容されていた難民、城外に避難していた住民も家に戻り始め、食べ物や飲み物商売をする者もあつて、われわれはよくマントウ(饅頭)を買つて食べた。

▼榎木義雄氏の証言 (野戦重砲兵第十聯隊観測係、伍長、現住所、埼玉県新座市野寺二一〇一) 私の部隊は千葉県浦ノ台で編成され、呉松に上陸以來、上海戦、南京に向かう追撃作戦に参加し、第九師団に協力しました。

12月9日、遙かに光華門が見える地点にきた時、われわれ観測班は、近くの工兵学校の屋根に登つて「城壁の破壊射撃」の射撃の観測にあたりました。城壁は堅固で、集中砲火を浴びせても煉瓦が割けるように崩れ落ちるだけで、なかなか破口はできません。この光華門の一角は、脇坂部隊の先鋒が占領していたが、9日から10日正午までは、降伏勧告に対する回答を待つて、射撃を中止しました。だが、敵はそんなことにお構いな

く、ドンドン猛射を浴びせてくるので、気の毒にも先鋒隊には多くの死傷者が出ました。総攻撃の命令は10日正午に下りました。11、12日の二日間砲撃して城壁を破壊し、崩れた煉瓦をよじ登って城壁上に日章旗をうち立てたのは13日早朝でした。城の内側から城門が開けられ、私たち観測班は正午ごろ入城しました。相当、街は森閑として静寂そのものでした。相当、街の奥の方まで行ったが、脱いだ服や略奪品が散らばっているだけでした。歩兵部隊の掃蕩が行われたのですが、銃声も余り聞かず、大したことはなかったようです。死体は十人か二十人ぐらい見ましたが、ともかく無気味なほど静かでした。

私たちは、すぐ城外の本隊に引き返し、十キロぐらい後方の輜重兵学校に翌年7月15日まで駐屯して次期作戦を準備しました。この間、日曜日には外出が許可され、二人連れで城内に遊びに行きました。正月を過ぎる頃には市民も戻ってきて、1月の終わりごろは飲食店やドロポウ市も開かれ、すっかり落着きを取り戻しました。

われわれは八カ月も南京に居て「大虐殺」の話など聞いたことも、見たこともありませんでした。(ゴシック・筆者)

▼西坂 中氏述懐 (歩兵第三十六聯隊軍曹、現住所、東京都杉並区非草一—〇〇)

私は歩兵第三十六聯隊(脇坂部隊)の一兵士として南京攻略戦に参加した。12月9日未明、光華門に突入り城壁の一角を占領したが、夜明けとともに城壁上から敵の一斉射撃をうけ、第一大隊は伊藤善光少佐以下多数の戦死者を出したまま、城壁の一角を死守していた。

われわれは、松井軍司令官から「降伏通告の期限まで戦闘中止」の命令をうけて、10日正午まで攻撃を中止したが、敵はそんなことに容赦なく、わが方に猛射を加えた。10日正午の期限切れと同時に、友軍の砲撃が再開され、いよいよ総攻撃が開始された。

光華門城壁の一角を占領し、たび重なる敵の攻撃をうけて死傷脱出し、悲惨な戦闘をつづけた第一大隊は、12日の夜を迎えた。ところが、夜中に敵の射撃がピタリととまった。どうも様子がおかしい。よくある中国軍退却のパターンである。城壁によじ登って夜明けに南京市内を見れば、各所に黒煙が上がるのみで、敵兵は一兵も居ない。

これよりさき、「南京攻略に関する軍司令官の訓示」が伝達されたが、この訓示は実に微に入り細にわたるものであったことを記憶している。

「南京は首都であり古い多数の文化遺産がある。また各国の権益や公館もあり、世界はこの戦争に注目している。住民に絶対に危害を加えてはならぬ。もし命令に違反した者は厳重に処断する。私の部隊は、城内に進入するや直ちに戦場掃除を行い、敵・味方ともども遺体を集めて友軍のものはダビに付し、敵の屍体はねんころに埋葬した。

福井県には門徒が多いので、兵隊の中で説経できる者を集めて、説経して、恩讐を越えて供養したことを覚えてる。

当時の日本軍は、現役兵を主体とし比較的若い予備・後備兵で編成され、軍紀は厳正であった。

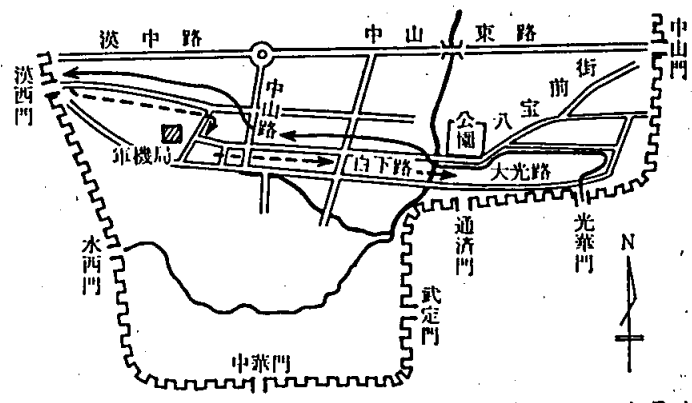
しかも、南京占領と同時に憲兵も進出し、重要箇所には歩哨が立ち、関係者以外は将校といえども、立入りを禁止されたのである。(ゴシック・筆者)

光華門落城直後の市内の状況 (歩兵第十六聯隊第四中隊長、土屋正治氏、46期、現住所、所沢市荒幡一五二—一五)

私は南京戦当時、一中隊長として参戦したが、12月13日朝、光華門を占領した歩兵第三十六聯隊(脇坂部隊)を超越して、わが聯隊の先陣として城内に進入したので、当時の市内の状況を述べる。

市街に深く進入すればするほど、まさに「死の街」という感じを深くした。敵弾の飛来はもろろん、人影一つ見えず、蕭然とした軒並みか果てしなく続いていた。何キロも前を進んだであろうか。とある大きな鉄筋コンクリート造りの建物に到達したが、ここで全く思いがけぬことに遭遇した。それは、講堂らしい室内に入ると、後送の余裕がなく取り残された重傷兵の枕辺に、白衣の多数の看護婦が毅然として立っている光景であった。私は深く頭を垂れて、そこを退去した。戦闘を覚悟して入城したが、この日は無血のうちに夕刻を迎えた。

4/19 i 城内掃蕩図(12月13日)



歩兵第十九聯隊、第三十六聯隊に関する限り、13日の城内進入後は戦闘行為はなく、捕虜を捕えたこともない。

第十九聯隊主力(第二大隊は湯水鎮の警備に派遣)、城内掃蕩後、通濟門北西地区に集結し、第三十六聯隊は光華門外の防空学校付近に集結し、一部をもって城内の大光路、白下路付近の掃蕩に任じた。

城内進入後、12月31日までの間、私の中隊は聯隊主力と離れて行動し、雨花台の戦闘で敵陣に突入後、行方不明になった一名の兵隊を捜し求めて、城内全城を歩き廻ったが、死体は殆ど目になかった。

ただし、時折り、難民区から摘発された敵兵が、トラックに乗せられて走って行く光景を目撃した。これらの兵のいくばくかが、揚子江河畔で銃殺されたであろうことは、率直に認めざるを得ない。

これが後年、「大虐殺」として喧伝される痛恨の一駒となると、当時知るよしもなくもたし、かつその中に多くの婦女子を含んでいるなどは、虚構であると信じて疑わなかった。

【注】8ページ歩兵第六旅団「掃蕩実施に関する注意事項(4)参照。

「光華門付近の惨状」とか、「地獄絵」とか言われているが、何を指しているのかわかりが苦しむ。光華門の戦闘では、12月10日午後5時頃、歩兵第三十六聯隊が決死隊をくり出して光華門を占領したが、9日以来実に三十六時間に及ぶ城外の激戦をくりひらげたわが聯隊は、あの狭隘な光華門付近の戦闘で、約三七〇名の死者を生じたのである。

光華門付近の惨状といわれるものは、この城壁攻撃時の惨状を指しているのではあるまいか。(ゴシック・筆者)

市街に深く進入すればするほど、まさに「死の街」という感じを深くした。敵弾の飛来はもろろん、人影一つ見えず、蕭然とした軒並みか果てしなく続いていた。何キロも前を進んだであろうか。とある大きな鉄筋コンクリート造りの建物に到達したが、ここで全く思いがけぬことに遭遇した。それは、講堂らしい室内に入ると、後送の余裕がなく取り残された重傷兵の枕辺に、白衣の多数の看護婦が毅然として立っている光景であった。私は深く頭を垂れて、そこを退去した。戦闘を覚悟して入城したが、この日は無血のうちに夕刻を迎えた。

▼通済門、入城後の状況 (歩兵第十九聯隊 第一大隊本部附軍曹、のち中尉、安川定義 氏、現住所、教習市三島町二七一二三)

13日朝、36i・19iの兩聯隊は、旅団長の指揮下に軍旗を城壁上に進め、皇居遥拝の後、午前10時頃入城し、通済門北側の城壁に沿う地区を掃蕩して、同門西側地区に兵力を集結し、爾後の行動を準備した。

これより先、11日正午過ぎ、雨花台付近より光華門正面に転進の際、城外飛行場一七號橋の転進路付近には、点々と敵の遺棄死体を散見した。また、光華門より入城して、城壁に沿う地区を西面に掃蕩したが、敵兵を見ず、所々に敵の遺棄死体を散見した。

また、通済門北側の公園路付近(あるいは更に西方の道路であったか?)で、西方から入城した敵勢のよい部隊に出合った。この付近の路上で民服を着た遺棄死体を散見したが、銃火を交えることはなかった(注、この敵勢のよい部隊は、九州の第六師団・大分聯隊(47i)の一部の掃蕩部隊である)。

聯隊は通済門西側地区の民家を利用して宿営したが、13日夜半、湯水鎮の軍司令部付近に残敵出沒し、救援の命令をうけて第一大隊は自動車輸送により出動し、16日夕掃蕩し、前記地区に駐留した。

私の見たこと 9月戦闘参加以来、大隊本部の同期の下士官二名、主計下士官一名が戦死し、人員の補充が無く、駐留間は職務柄、書類の整理に多忙をきわめた。入城式、慰霊祭にも参加せず留守番であったが、ある日大隊長から「市内見学に行くから同行せよ」と命ぜられ、田中政喜軍医大尉(熊本県玉名郡玉東町稲佐一二九)、牧村軍曹(先年死歿)らと、乗馬により随行、中山路を経て挹江門を出て下関に至る本通りを見学した。

この時、挹江門を出て間もなく、道路の南側に、中国兵の屍体が果々として連なっていた。この中には市民の服装をしたものも、一部混じっていたと思う。大隊長は「下関から対岸に逃走しよう」と詰めかけた敵が、このように戦死したのである」と話されたことを記憶している。なお、挹江門までの城内経路では、屍体はまったく見なかった。西島大隊長は、東京裁判に証人として出廷され、虐殺事件を全面的に否定しておられます。その後、聯隊は12月25日、南京を出発し、連日行軍して翌年1月5日、崑山に到着、一部は大倉に駐留し、爾後の作戦を準備した。因みに、9月末参戦以来、南京攻略までのわが聯隊の損害は、

戦死 四名の大隊長以下九二〇名
戦傷病入院者 二、三〇〇名にも達した
「光華門内道路の地獄絵説」の考察
巷間、「光華門から中山東路へ北に向かう道路の両側には、えんえんと散兵壕がつづき、無数の焼けただれた死体が埋められ、その上に敷かれた丸太の上を、戦車が容赦なく走っている。死臭、硝煙の臭いとともに、焦熱地獄、血の海地獄に立っている錯覚に陥った」という目撃記を引用して、日本軍による惨殺・地獄絵説を述べられているので、若干の考察を述べてみたい。

光華門から中山東路へ北に向かう道路は、城内飛行場東側を通り古物保存所に至る。この正面は歩兵第六旅団(35i・7i)が城内に進入し、主として35iが掃蕩した地区であるが、同旅団関係者の証言(後掲)では、このような惨状は見えない。

光華門攻撃で活躍した独立軽装甲車第七中隊は、13日22時頃、城外の防空学校を出発し、中山門から進入して逸仙橋に到着して宿営した。14日は9時出発、中山東路、中正街の主要道路を前進して、35iの掃蕩に協力したが、一度も銃火を交えることなく、飛行場北端で中国兵二、三十名を捕虜としている。(渡辺末蔵氏の証言)
また、中山門から進入した戦車第一中隊は、13日夕、古物保存所付近に宿営し、14日

以降7iに協力して北部地区の掃蕩に協力した(後掲、城島越夫氏の証言)。この戦車隊に遅れて中山門から夜間入城した戦車第五大隊は、飛行場北側の湿地にはまり込み、14日、丸太や板切れを敷いて引揚げ作業を行っている。このような資料・証言からみると、13日、14日に光華門内の道路で地獄絵のような惨景が起こるはずがない。目撃者と称する人は、いつ、どこから入城し、どこで目撃したのであろうか。

四、歩兵第六旅団(7i・35i)の城内進入と掃蕩

(筆者注) 本資料は佐伯龍太郎氏(46期・富山市)、故佐藤弥太郎氏未亡人(金沢市)、金沢宿行会長・賀谷竹雄氏(50期)、歩七戦友会・村澤藤作氏らのご尽力により、左記諸氏よりいただいたものである。
元師団情報主任参謀、松沢恭平氏

- 同 師団参謀部書記 杉野勝次氏 (33期、町田市)
- 歩兵第35聯隊第二大隊長 土田兵吾氏 (28期、町田市)
- 同 聯隊副官 青木栄一氏 (36期、東京都)
- 同 中隊長 三宅輝彦氏 (48期、埼玉県)
- 同 第二大隊本部附軍曹 野村敏明氏 (富山県)
- 歩兵第六旅団副官 吉松秀孝氏 (34期、銚子市)
- 戦車第一中隊長 城島越夫氏 (宇部市)
- 独立軽装甲車第七中隊長等兵 渡辺末蔵氏 (栃木県)
- 歩兵第七聯隊戦友会 山本堯貞氏はか 十名

- (1) 旅団は当面の敵を撃破して、中山門西方約二キロ、南北に流れるクリークの線に進出する。
 - (2) 第十六師団との戦闘地境は中山路とし、中山路は第十六師団に属す。
 - (3) 歩兵第三十五聯隊(第一大隊欠)は中山門西方地区に集結して、師団長の直轄となり、第一大隊は右第一線となつて、中山路に沿う地区をクリークの線に向かい進出する。
 - (4) 歩兵第七聯隊(第三大隊欠)は左第一線となり、なるべく速やかに外五竜橋以北の地区に転移し、クリークの線に進出する。
 - (5) 両第一線の戦闘地境は、飛行場中央を連ねる線に延伸する。
 - (6) 両第一線聯隊は、特に有力なる一部をもつて前進地域を掃蕩する。城内の戦闘にあつては、別紙「南京入城に関する軍司令官注意事項」により、特に古物保存所に立ち入ることを禁じ、その保存に注意することと。
 - (7) 戦車第一中隊は、中山道西南側に集結して待機すべし。(注、中山東路の意味)「南京城内の掃蕩要領」
 - (1) 城内の残敵掃蕩に関しては、入城に関する注意事項を敵守せよ。但し、敵が抵抗する地帯はこの限りにあらず。
 - (2) 敵が抵抗する場合には、家屋の焼却には特別の注意を払い、かえつて部隊の交通を遮断しないように注意せよ。
 - (3) 発電所、電気局、郵便電信局、水源地、瓦斯会社、踏倉庫、工場等、軍が利用すべき箇所は速やかに占領し、敵の破壊焼却を予防すること。
- 遁走する敵は、大部分が便衣に化せるも

のと判断されるので、その疑いある者は悉く検挙し、適宜の位置に監禁する。

(4) 隣接兵団と連絡して掃蕩を実施するが、連繫不能の場合においては、作戦地域の通路には所要の守備兵を配置し、敗残兵ならびに住民の交通を遮断せよ。

(5) 特に友軍相撃に陥らないように最善の方法を講ぜよ。これがため、つとめて他部隊と連繫するは勿論、国旗等をもって先頭、側方等を標示せよ。

(6) 掃蕩実施にあたっては、特に敵が敷設した地雷、爆破装置、毒瓦斯、毒物投入等に注意せよ。

(7) 掃蕩とともに金庫、兵器、糧秣、倉庫その他軍用資源を調査し、必要に応じて、これに監視兵を付するとともに、速やかに報告せよ。

(8) 注意事項の履行が補助憲兵だけでは困難な場合は、掃蕩隊長直轄の下に多数の巡察を派遣し、その目的を達せよ。

「掃蕩実施に関する注意事項」
(1) 軍司令官の注意事項を一兵に至るまで徹底させた後、掃蕩を実施せよ。

(2) 外国権益の建物は敵がこれを利用してゐる場合の外、立ち入りを厳禁する。重要な箇所には歩哨を配置せよ。

(3) 掃蕩隊は残敵掃蕩を任とし、必ず将校(准尉を含む)の指揮する部隊をもって実施し、下士官以下各個の行動を絶対に禁ずる。

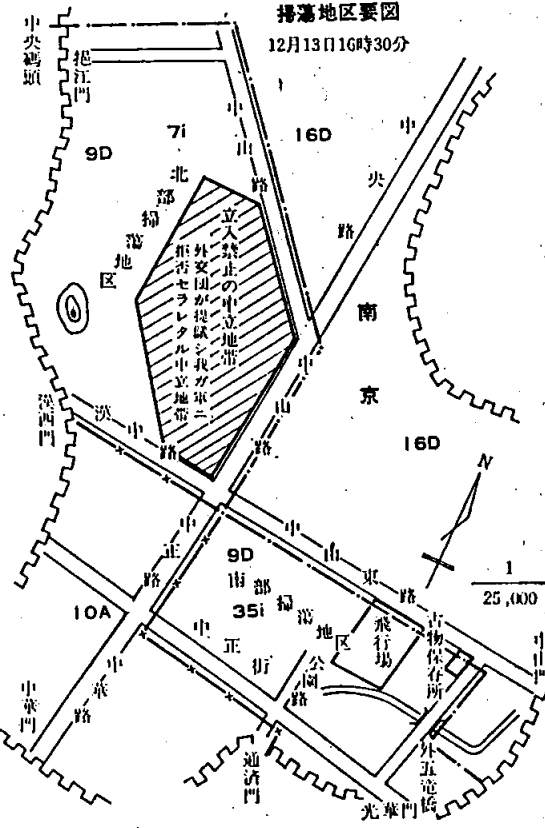
(4) 青壮年はすべて敗残兵又は便衣兵とみなし、すべてこれを選捕監禁せよ。青壮年以外の敵意なき支那人、とくに老幼婦女女子に対しては、寛容の心をもって按し、彼等をして皇軍の威風に敬仰せよ。

(5) 銀行、銭荘等には侵入を禁止し、歩哨を配置せよ。

(6) 家屋内に侵入し掠奪に類する行動を敢て戒め、必要以外の物品を濫用廃棄してはならない。

(7) 放火は勿論、失火といえども軍司令官の注意にあるように厳罰に処する。

掃蕩地区要図
12月13日16時30分



(8) 友軍相撃については敵に注意せよ。合音 旅団命令の要旨は次のとおりである。葉は「金澤」「富山」と定める。

(9) 掃蕩実施部隊は、師団長が特に選抜した部隊であるから、軍紀を厳にし、その行動を慎重にせよ。

(10) 火災を発見したならば、付近部隊は勿論、掃蕩隊は消火にとめよ。
昭和12年12月13日
歩兵第六旅団長 秋山義允

12月13日の掃蕩行動

戦車第一中隊は中山門外に待機していたが、午後4時5分、工兵隊による土義除去作業完了とともに、戦闘車輛のみをもって第

四、第一、本部、第二、第三小隊の順序で入城し、西方約一キロの古物保存所付近に兵力を集結した。そして、歩兵第六旅団長の直轄となつて爾後の掃蕩を準備した。

午後5時50分、「六旅作命第一三八号」(午後4時30分発令)および「七作命第一〇四号」(午後5時30分発令)を受領した。

大隊はその兵力の三分の二を使用し、兩余は子備隊として「東廠街」に待機させた。

戦車第一中隊(二小隊基幹)は午後6時50分、古物保存所南側を出発、中山東路を前進して午後7時20分頃、中山路中央十字路に達し、同地に停止して歩兵の掃蕩を支援した。

当時は友軍の歩兵部隊が進入していたので、敗残兵と銃火を交えることもなく、住民は家の奥の方に居たようであるが、街路兩側の民家は戸を締めており静かであった。本道上には障礙物は無かつたが、中央ロータリーのところにトーチカ式の銃座があつた。一触即発の緊張した状態ではなく、注意しながら前進した。銃砲は使用せず、示威行進で歩兵の支援後、精神的支援にすぎなかつた。

午後9時30分頃、古物保存所南側の車庫に掃蕩した。(ゴソック・筆者)

12月14日の掃蕩行動

歩兵第七聯隊長伊佐大佐は、13日午後9時30分、東廠街の聯隊本部において、明14日の掃蕩に関する命令を下達した。その大要は次のとおりである。

(1) 各大隊の掃蕩区域は別紙要図のとおりで、掃蕩隊に使用する兵力は、少兵中隊及び機関銃中隊を主とし、必要に応じて他の部隊を用いる。

(2) 掃蕩隊は午前9時宿营地を出発し、夕刻までに掃蕩する。掃蕩隊の服装は、軍装にして背義を除く。

(3) 掃蕩にあたっては、旅団長の掃蕩に関する注意を厳守し、掃蕩の結果は各大隊ごとに取りまとめ報告すること。

(4) 戦車中隊(一小隊欠)は午前10時宿营地を出発し、担任区域外周に沿う主要道路(中山北路、漢中路)を掃蕩して掃蕩する。

(5) 工兵中隊(一小隊欠)は一部を残置し主力は午前8時宿营地出発、担任区域内の重要道路および広場の地雷の削出、撤去に任せよ。

(6) 各大隊は、その担任区域内に別紙要図

の如く衛兵を配置し、警備、軍紀風紀の保持に任ぜよ。これがため、しばしば巡察を派遣し、外国の建物、銃銃等には歩哨を配置せよ。

衛兵の交代は毎日午後3時とし、その服装は軍装とし、立哨中のもは背囊を除く。ただし、明14日午前8時宿営地出発、配置につくこと。

(ゴシツク・筆者)

戦車中隊は、14日午前9時30分、第四、第二小隊、中隊長車、第三小隊の順序で、古物保存所付近を出発し、中山路中央十字路を経て中山北路を前進し、鼓樓東北三叉路付近に進出した。そして、歩兵第七聯隊の北部地区掃蕩、主として第三大隊に協力し、多数の俘虜および兵器を鹵獲して午後5時30分集結地に帰還した。

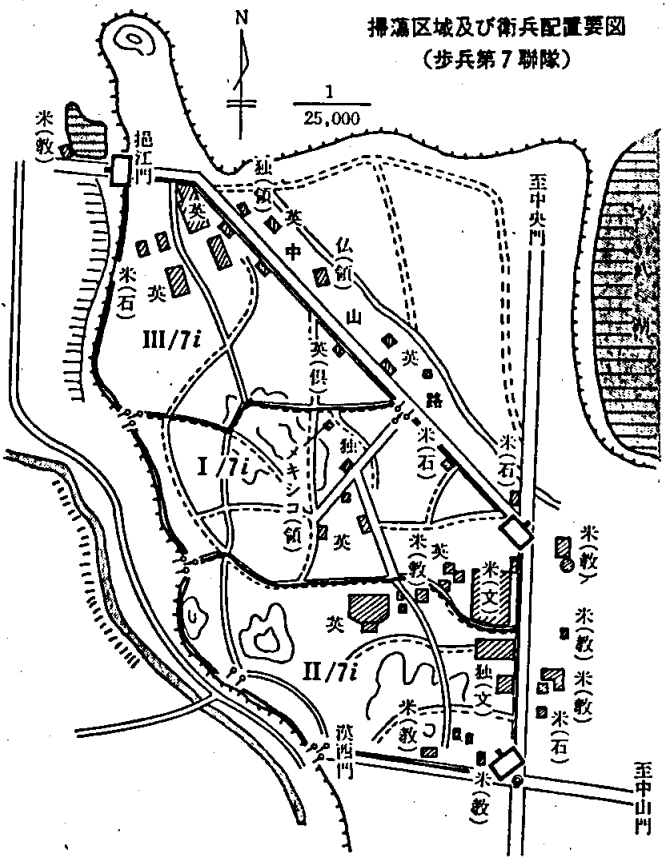
- 俘虜 二五〇名 乗用自動車 五
- 小銃 二三〇 側車付自動
- 軽機関銃 十一 二輪車 五
- 対戦車砲 二 人員輸送車 二
- 機関砲 一 自動貨車 二

この掃蕩間、反抗の気配があつた敗残兵約七、八十名を射殺している。

- (1) 14日の掃蕩実施間、歩兵第七聯隊長は次のような「俘虜、外国権益に対する注意」を命令し、部下に徹底をはかった。
- (2) 担任区域内には歩七以外の部隊、無用の軍人の立入りを厳禁する。
- (3) 各隊の俘虜は、その担任地区内の一ヶ所に収容し、その食糧は師団に請求する。
- (4) 歩七は城内に宿営するのではなく、掃蕩隊として入城したものである。掃蕩が完了したならば城外に出ることを忘れてはならない。
- (5) 外国権益内に敗残兵が多数いる見込みであるが、これに対しては語学堪能者を選抜してあたらしめるから、各隊は外方より監視し、無用の誤解、衝突を起さないようにすること。

(ゴシツク・筆者)

掃蕩区域及び衛兵配置要図 (歩兵第七聯隊)



歩兵第七聯隊の掃蕩区域、衛兵配置要図、別紙のとおり。

- (1) 中山路の十字路に停車して警戒中、脇屋がハッキリしないが、下車して付近にあった講堂のような建物に入ると、敗残兵らしき者数十名がおり、銃撃をうけ急いで乗車したが、大目玉を食らった。
- (2) 中山北路の左側(場所不明確)に中国の通信隊の兵舎があり、戦車の機関銃の威嚇射撃により、約一五〇名近くの武装兵を俘虜とした。兵舎の門前で、抵抗の気配のあつた三、四名を、同行の歩兵が射殺した。
- (3) 中山北路から揚子江岸に行く途中は、遺棄された車輛や寝台等の障碍によって河岸まで行けなかつた。押収した乗用車、消防車は五、六輛であり、その中にドイツ製のデーゼル車もあった。
- (4) 道路付近には敗残兵や住民は居らず威嚇、敗残兵をおびき出すために銃撃したことはあるが、戦車砲は使わなかつた。
- (5) 中隊本部附の草場軍曹は、軽装甲車で歩兵第七聯隊との連絡に任じていたが、漢西門外で銃声があるので、門の出口まで行ってみると、友軍の歩兵が機関銃を据えて、敵の正根兵八十名余りを射殺していた。城壁の外は大きなクリークのようであつた。

12月15日の掃蕩行動 (ゴシツク・筆者)

第九師団は15、16日にわたり、師団作戦地域内で「官憲微発」を実施するとともに、掃蕩隊をもって残敵の掃蕩を行った。歩兵第七聯隊は、五ヶの微発掩護隊(将校又は准尉一、下士官兵三十二)と、小銃四分隊に編成を編成して、師団兵器部長および経理部長の区処を覆けて微発を実施した。また、聯隊は新に軽装甲車一中隊を配属せられ、各隊は前任務を続行し、速やかに残敵の掃蕩をはかった。師団掃蕩隊長秋山少将は両聯隊の掃蕩区域を巡視されたが、これが護衛のため、歩兵将校の指揮する小銃、軽機各一分隊と戦車中隊から戦車二、乗用車二、トラック一台を差し出した。

12月16日、難民区内の掃蕩

- (1) 歩兵第七聯隊は16日、難民区内に潜入した敗残兵の掃蕩を実施した。歩七作命の概要は次のとおりである。
- (2) 本15日まで捕獲した俘虜を調査したところ、ほとんどが下士官兵のみで、将校は認められない。将校は便衣に着かえて難民区内に潜入したものである。
- (3) 聯隊は明16日、全力を難民区に指向し、徹底的に敗残兵を掃蕩する。憲兵隊は聯隊に協力するはず。
- (4) 各大隊は明16日早朝より、その担任地域内とくに難民区の掃蕩を続行せよ。
- (5) 戦車中隊、軽装甲車中隊は待機せよ。聯隊長は16日午後以降、最高法院西方約一軒、赤壁路の聯隊本部に位置する。戦車中隊は中隊隊列とともに勵志社跡に集結して、戦力の回復につとめるとともに、城内掃蕩隊を随時支援できるように待機した。かくて、担任地域内の掃蕩をおわり、17日の入城式、18日の陸海合同慰靈祭を迎えたのである。

城島趙夫氏(前出)の証言

洞富雄著「南京大虐殺」によると、中山路と中央路の二条の道路は血の道路に變じ、道路上を埋めた死体の上を、戦車がキャタピラでふみつぶしながら進んだ……」かのように

書いてあるが、このようなことは決してな

戦車兵は犬猫でさえ、ひき殺さぬよう注意し、安全運転を心掛けたものです。「狂闘」とは敵掩蓋銃座などを踏みつぶすことであ

「血が流れて河ができた……」など、戦車のことを知らない人の創作でしょう。戦車中隊は城内掃蕩に使用されたが、殆ど銃や砲による射撃は行わず、歩兵の掃蕩作業の支援、後援の役割をはたしたのです。

当時、部下もよく命令を守って働いてくれましたが、戦後に、「夢物語」のようなこんな問題が起こるなど、全く思いもよらなかつたことです。

淨化鎮—南京占領前の彼我の損害

(第九師団作戦記録に拠る)

友軍 將校以下 四六〇名
死者 將校以下 一、一五六名
傷者 將校以下 四、五〇〇名
敵軍 死体 四、五〇〇名

他に城内掃蕩にあたり約七千余の敗残兵を殲滅した。

鹵獲品 MG十二挺、戦車七輛、LMG十四挺、小銃四二〇挺、迫撃砲五門、飛行機四機、手榴弾約二五〇〇〇、小銃(MC)弾約四〇〇〇〇

砲、火薬庫六棟、その他多敷

(注) 城内掃蕩にあたり「約七千余の敗残兵を殲滅」とあるが、参戦者の証言をみると

このような情景が認められない。当時、やもすれば陥り易かつた誇張した戦果発表であらう。

独立軽装甲車第七中隊の城内掃蕩 (同中隊上等兵、のち少尉、渡辺末成氏、現住所、栃木県下都賀郡大平町、町会職員)

私は南京戦争当時は十九歳の若者で、現役歩兵上等兵として軽装甲車の操縦手であった。昭和十二年十二月十日、光華門付近の戦闘において、第二、第四小隊は歩兵第三十六聯隊の光華門攻撃や、第一線に対する弾薬輸送に任じ、中隊主力(中隊長、第一、第三小隊)は歩兵第三十五聯隊の戦闘に協力した。

中隊は十二月十三日、城外の防空学校に集結した。待機していたが、22時頃、旅団司令部により防空学校を出発し、七聖橋—高橋門—麒麟門—中山門道を進んで、23時30分、中山門から城内に入り逸仙橋に到着した。そして、中隊長は掃蕩隊長である秋山旅団長および歩兵第三十五聯隊に連絡した。

この日、私たちより遅れて戦車第五大隊(細見戦車隊)が中山門より入城し、城内飛行場北側付近に一時待機したが、夜暗のため誤って湿地にめり込み、翌朝、竹藪を敷き、その上に戸板を置いて引揚げ作業をする光景を見た。

十二月十四日、歩兵第三十五聯隊に配属されて、師団の南部掃蕩地区を、戦車第五大隊の戦車中隊とともに掃蕩することになった。中隊長矢口大尉は、乃木大将の「昨日の敵は今日の友」という言葉を引用されて、「中国の投降停戦に対しては、絶対に暴力をふるってはならない。民家に入ったら嚴重に処罰する」と厳しく注意された。

中隊は9時出発、中山東路、中正街の主要な道路を進み、歩兵の掃蕩を支援したが、一度も銃火を交えることはなかった。城内飛行場付近で、無抵抗の中国兵二、三十名を捕虜としたが、この投降兵は兵站(收容部隊)に引き渡した。道路両側の民家は堅く戸を閉

十二月十五日—中隊は歩兵第七聯隊に配属され、戦車第一中隊(城島中隊)とともに、北部地区の掃蕩に協力した。

中隊は二ヶ小隊を派遣し、9時、集結地出で、中山東路—漢中路を進み漢西門に向かった。歩兵は二ヶ中隊の兵力で掃蕩していたが、戸外には人影を見ず、中隊長は時々、車長に下車集合を命じて相談した。ヒソソリと平穩なので早く引き揚げ、集結地の飛行場に掃蕩した。

戦車第一中隊は、中央ロータリーから中山北路を掘江門方面に進進したのと思う。戦車第五大隊は15日、中山路—中央路から中山門を経て城内飛行場北側に帰った。この行動は、城外の敗残兵の掃蕩であったようだが、中央門付近では戦闘を交えず、大した戦果はなかったようである。

私の中隊、私の見た限りでは、残虐行為など一切なかったことを声を大にして申したい。光華門から北に通ずる道路、飛行場付近で、日本軍が不法な行動をしたかのように報道されているが、そのようなことはなかったと断言する。

中隊はその後、司法院(中山路近傍)を宿舎として割り当てられ、翌年2月頃まで駐留した。司法院には人も居らず、屋内も荒らされておらず、そのまま使用した。

12ページ、歩七・平本渥氏の証言によれば、12月13日夕、司法院には多数の難民が收容されていたという。13ページ、極東軍事裁判、伍長徳証言によれば15日、司法院から二千余名が連行され西大門外で銃殺されたという。

私は、南京攻略戦当時は金沢の歩兵第六旅団次級副官として、秋山旅団長にお仕えした。

秋山旅団長は、何びととも認める硬骨の武士であり、その指揮統率率は厳正で、「虐殺」などということを許される方ではなかった。戦闘激烈を極める時も、馬骨の色を見せられるようなことはなく、司令部将兵の第一線からの電話授受の態度にも注意せられ、旅団長の不満を、第一線に洩らすようなことは、決して許さなかった。

第一線の問題があれば、旅団長自から弾雨の中を第一線に行かれ、隊長と会い、冷静に対処された。その際、私は必ず随行した。

入城時の旅団司令部の行動は、私は軍砲隊が総力をあげて、城壁に突撃路を開設する集中射撃を観察した。射撃は早朝に開始されて夕刻に及び中山門から光華門東側に至る東面した城壁、とくに中山門寄りの正面に集中され、幅約十米の突撃路が開設された。

第一線の歩兵第七聯隊は、この破壊口から城内に進入したが、遅れて旅団司令部も、この破壊口を利用して城壁上に進出した。城壁上に旅団司令部設置後、少したって、歩兵第七聯隊長伊佐大佐が足早やに来着され、旅団長に状況報告をし、両者は感激の握手をされた。

城壁上に捕虜を並べて銃殺したなどという狼藉の跡は見当たらなかった。伊佐大佐の報告の態度を見ても、冷静沈着、やがて城壁を降りて城内に進入された。私は、「速やかに旅団司令部として適当な位置を決定すべき」命令をうけて、小型戦車(注、軽装甲車)に搭乗して、中山門道を兼進すること約一キロ、好適の位置を発見して、司令部を誘導し指揮所を開設した。

入城後から南京出発までの所感 旅団は入城後、態勢を整理し、蘇州へ転進の準備をしたが、この間、掠奪、暴行、住民殺害等の事件は、見聞していない。

城内掃蕩戦? 城内進入にあたっては敵の撤退が意外に迅速で、予期した抵抗に遭遇せず、住民の姿も見なかった。したがって、極めて迅速に終了して引き揚げた。

私が兵若干名を連れて城内を巡視した際、或る大きな建物を偵察した。空家と思ひ進入して大きな廊下を通り、部屋の扉を開けようとしたが、堅く閉めである。やむなくドアを蹴って強引に開けたところ、部屋の中には中国兵らしい軍服を着たものが五、六百名、寸し結めになっている。入口寄りの下士官らしい者が、毅然として拳手の敬礼をした。私は一瞬ドキッとしたが、受礼の後、右手をもつて一同を押し静めるようにして、中国語で「心配いらない」と言ったら、安心したらしい。長居は無用、手を振りながら早々と退去した。

危機一発のところだったが、この件を速やかに旅団長に報告しようとして帰ったら、旅団長は、南京の住民は温和なので、過激な取扱いをしないように、厳重に注意され、これは各部隊に徹底していた。

わが部隊の城内駐留間、住民は平静で、無事故で転進することができた。

▼4、歩兵第三十五聯隊將兵の証言
野村敏明氏の証言 (第二大隊本部附軍曹のうち中尉、現住所、富山県婦負郡婦中町速星八三六一)

私は当時、歩兵第三十五聯隊第二大隊本部附軍曹として戦闘に参加し、引続いて12日間、南京に滞在した。

中山門正面の敵陣地は、城壁から約千百メートルの線を第一線とし、縦深約三百メートルにわたり三線の陣地を構え、鉄条網を張りめぐらしていたが、兵力は予想外に僅少であった。

大隊は、右から第二、第三、第一中隊の順で攻撃配置につき、12月11日午後2時、第一陣地に突入し、引き続き約一時間半で全陣地を突破して城門に迫った。この間、友軍の戦車が協力にやってきたが、地形が複雑で障礙が多く、地雷が敷設されているため行動を阻まれた。

中山門及びその左右の城壁上の敵も強力ではなかつた。12日夜暗に乗じて、第二中隊が城門に肉薄し、敵の射撃が次第に衰えたの、將校斥候を派遣したところ敵は既にいなくなつた。將校斥候は、そのまま居残り、13日早朝、第二中隊主力が中山門とその周辺を完全に確保したのである。左第一線であった第一中隊の本戦闘における損害は、戦死六、負傷十九と記録されている。

第一線中隊は、引き続き城内に向かって進撃をはじめたが、中央交差点に至るほど中間の地点で「爾後の前進は命令による」と発令されて停止した。これまでの間、市街戦は起これなかつた。そして、12月24日、南京を離れるまで、部隊は同地を動かかなかつた。

私は、大隊本部とともに午前8時頃、中山門から城内に入ったが、途中死体は見なかつた。

私の体験記
「12月13日のちようどその頃、中山門付近の城壁上で、一列に並べられた捕虜が銃剣で刺されて突き落とされていった」のを見た新聞記者がいろいろと尋ねたが、当時そんな噂話を聞いたこともない。

日時は覚えていないが、外出許可がおりて揚子江岸に行ったとき、一新聞記者から、「数日前、この河岸に沢山の死体があつた」ということぐらひである。その時私は、河向こうへ逃げようとして集まつた敵が、日本軍に撃たれたのだらうと思つた。

私が外出中に見た街路は、さっぱりとして人影もなく静かであつた。敵兵の死体も見なかつた。一般住民にも会わなかつた。方々で大掛かりな屠殺行為が行われているといふような気配は感じられなかつた。

洞氏の「批判」について
私は富山県の片田舎に住んでいるが、鈴木明著「南京大屠殺のまぼろし」を読んで、初めて南京戦でおかしな噂が流れていることに驚き、鈴木氏に私の体験記を送つた。これが、作家の山本七平氏の目にとまり、「私の中の日本軍」の中に、N軍曹の記録としてとりあげられ、南京事件の虚構性立証の証拠とされた。

ところが、洞富雄氏が昨年12月『決定版・南京大屠殺』(徳間書店)で、山本説を批判し、「歩兵第三十五聯隊(富士井部隊)が中山門を占領した」というのは嘘である。従つて、N軍曹の記録は信憑性が疑われると主張し、その証拠として「中山門一番乗り大野部隊の万歳」の写真を提示した。

ところが、この写真には中山門が写つておらず、崩れた城壁上に数十名の兵隊が居るだけである。私は、当時上海派遣軍司令官が歩兵第三十五聯隊に授与した感状と聯隊が中山門を進入する写真のコピーを洞氏に送つて反論したが、何の返事もない。

【筆者注】中山門一番乗りが20いか35いかということは、森英生氏(前出)が述べているように、南京事件説明の面からみれば、本質的な問題ではない。また、初め「20か一番乗り」を信じていたた森英生氏が「35か一番乗り」もあり得るのではないかと考へられたように、今日においてはこれを解き明することは困難であらう。

このことは、所謂「体験記・見聞記」なるものから、歴史の真実をつかむことが、いかに難しいかを如実に示していると考えられる。

▼清水真信氏の記録 (歩兵第三十五聯隊第三中隊長)
12月13日午前3時半頃、小出中尉の指揮する小隊は、中山門左側三百メートルの破壊口から突入して城壁を占領し、中隊主力は6時10分に中山門正面より中山門を占領した。城壁上からみると、目の前に飛行場があり、逃げ遅れた敵が見える。午前8時頃になると、友軍が銃々と入城してくるが、見知らぬ部隊の命令により、中隊は再び尖兵となって市内の掃蕩に進発し、まず飛行場を占領したが、敵兵は既に退散して居なかつた。中隊は格納庫を本陣として、広い飛行場の建物をもつ二つ点掃蕩し、さらにクリークの向こう側の市内へと掃蕩の手を伸ばした。そして、クリークを渡つた向こう側の街で13日の夜を迎えた。その夜は、部隊命令で民家に宿営したが、各方面と連絡をとり警戒部署を定めて、やつと午後10時すぎに夕食をとつた。

このとき、約百メートル離れた工場らしい建物の中に、敵兵が数百名かくれているとの報告があつた。それと、その工場らしい建物を包囲して、間の中で掃蕩戦をはじめた。敵は手榴弾を盛んに投げつけてきたが、それも次第におさまり、30分後には全く沈静した。敵兵は殆んど逃亡したが、人数は八十名ぐらひであつた。

その建物を調べてみると、敵の新炭補給所であることが判明した。暗闇のなかでよくわからないが、木炭がぎっしり詰まつた倉庫があつた。盗まれないように封印して、その夜は皆ぐっすりと眠つた。

明くれば14日、前日に引き続き城内掃蕩を行つたが、各隊の顔は見連えるように生き生きている。その日の夕方から夜にかけて、掃蕩残れの敗残兵が苦しまぎれに放火した。これには、さすがの勇士たちも東奔西走、消火にへトへトになった。12時すぎ、やつと一段落して寝ようとしたところへ、また情報が入つた。

「敗残兵が新炭倉庫に放火、目下盛んに燃焼中」というのである。ただちに、中隊長自ら指揮して消火があつたが、火の手が早く寄りつたが、全焼するという事件があつた。

▼野村敏明氏(前出)は次のような私信を寄せられた。
「清水中隊長の城内掃蕩の記録は、素っ気ない記録のように思われるかも知れないが、当時私が大隊本部書記として、第一線

隊内を巡視した際、或る大きな建物を偵察した。空家と思ひ進入して大きな廊下を通り、部屋の扉を開けようとしたが、堅く閉めである。やむなくドアを蹴って強引に開けたところ、部屋の中には中国兵らしい軍服を着たものが五、六百名、寸し結めになっている。入口寄りの下士官らしい者が、毅然として拳手の敬礼をした。私は一瞬ドキッとしたが、受礼の後、右手をもつて一同を押し静めるようにして、中国語で「心配いらない」と言ったら、安心したらしい。長居は無用、手を振りながら早々と退去した。

危機一発のところだったが、この件を速やかに旅団長に報告しようとして帰ったら、旅団長は、南京の住民は温和なので、過激な取扱いをしないように、厳重に注意され、これは各部隊に徹底していた。

わが部隊の城内駐留間、住民は平静で、無事故で転進することができた。

▼4、歩兵第三十五聯隊將兵の証言
野村敏明氏の証言 (第二大隊本部附軍曹のうち中尉、現住所、富山県婦負郡婦中町速星八三六一)

私は当時、歩兵第三十五聯隊第二大隊本部附軍曹として戦闘に参加し、引続いて12日間、南京に滞在した。

中山門正面の敵陣地は、城壁から約千百メートルの線を第一線とし、縦深約三百メートルにわたり三線の陣地を構え、鉄条網を張りめぐらしていたが、兵力は予想外に僅少であった。

大隊は、右から第二、第三、第一中隊の順で攻撃配置につき、12月11日午後2時、第一陣地に突入し、引き続き約一時間半で全陣地を突破して城門に迫った。この間、友軍の戦車が協力にやってきたが、地形が複雑で障礙が多く、地雷が敷設されているため行動を阻まれた。

中山門及びその左右の城壁上の敵も強力ではなかつた。12日夜暗に乗じて、第二中隊が城門に肉薄し、敵の射撃が次第に衰えたの、將校斥候を派遣したところ敵は既にいなくなつた。將校斥候は、そのまま居残り、13日早朝、第二中隊主力が中山門とその周辺を完全に確保したのである。左第一線であった第一中隊の本戦闘における損害は、戦死六、負傷十九と記録されている。

第一線中隊は、引き続き城内に向かって進撃をはじめたが、中央交差点に至るほど中間の地点で「爾後の前進は命令による」と発令されて停止した。これまでの間、市街戦は起これなかつた。そして、12月24日、南京を離れるまで、部隊は同地を動かかなかつた。

私は、大隊本部とともに午前8時頃、中山門から城内に入ったが、途中死体は見なかつた。

私の体験記
「12月13日のちようどその頃、中山門付近の城壁上で、一列に並べられた捕虜が銃剣で刺されて突き落とされていった」のを見た新聞記者がいろいろと尋ねたが、当時そんな噂話を聞いたこともない。

日時は覚えていないが、外出許可がおりて揚子江岸に行ったとき、一新聞記者から、「数日前、この河岸に沢山の死体があつた」ということぐらひである。その時私は、河向こうへ逃げようとして集まつた敵が、日本軍に撃たれたのだらうと思つた。

私が外出中に見た街路は、さっぱりとして人影もなく静かであつた。敵兵の死体も見なかつた。一般住民にも会わなかつた。方々で大掛かりな屠殺行為が行われているといふような気配は感じられなかつた。

洞氏の「批判」について
私は富山県の片田舎に住んでいるが、鈴木明著「南京大屠殺のまぼろし」を読んで、初めて南京戦でおかしな噂が流れていることに驚き、鈴木氏に私の体験記を送つた。これが、作家の山本七平氏の目にとまり、「私の中の日本軍」の中に、N軍曹の記録としてとりあげられ、南京事件の虚構性立証の証拠とされた。

ところが、洞富雄氏が昨年12月『決定版・南京大屠殺』(徳間書店)で、山本説を批判し、「歩兵第三十五聯隊(富士井部隊)が中山門を占領した」というのは嘘である。従つて、N軍曹の記録は信憑性が疑われると主張し、その証拠として「中山門一番乗り大野部隊の万歳」の写真を提示した。

ところが、この写真には中山門が写つておらず、崩れた城壁上に数十名の兵隊が居るだけである。私は、当時上海派遣軍司令官が歩兵第三十五聯隊に授与した感状と聯隊が中山門を進入する写真のコピーを洞氏に送つて反論したが、何の返事もない。

【筆者注】中山門一番乗りが20いか35いかということは、森英生氏(前出)が述べているように、南京事件説明の面からみれば、本質的な問題ではない。また、初め「20か一番乗り」を信じていたた森英生氏が「35か一番乗り」もあり得るのではないかと考へられたように、今日においてはこれを解き明することは困難であらう。

このことは、所謂「体験記・見聞記」なるものから、歴史の真実をつかむことが、いかに難しいかを如実に示していると考えられる。

▼清水真信氏の記録 (歩兵第三十五聯隊第三中隊長)
12月13日午前3時半頃、小出中尉の指揮する小隊は、中山門左側三百メートルの破壊口から突入して城壁を占領し、中隊主力は6時10分に中山門正面より中山門を占領した。城壁上からみると、目の前に飛行場があり、逃げ遅れた敵が見える。午前8時頃になると、友軍が銃々と入城してくるが、見知らぬ部隊の命令により、中隊は再び尖兵となって市内の掃蕩に進発し、まず飛行場を占領したが、敵兵は既に退散して居なかつた。中隊は格納庫を本陣として、広い飛行場の建物をもつ二つ点掃蕩し、さらにクリークの向こう側の市内へと掃蕩の手を伸ばした。そして、クリークを渡つた向こう側の街で13日の夜を迎えた。その夜は、部隊命令で民家に宿営したが、各方面と連絡をとり警戒部署を定めて、やつと午後10時すぎに夕食をとつた。

このとき、約百メートル離れた工場らしい建物の中に、敵兵が数百名かくれているとの報告があつた。それと、その工場らしい建物を包囲して、間の中で掃蕩戦をはじめた。敵は手榴弾を盛んに投げつけてきたが、それも次第におさまり、30分後には全く沈静した。敵兵は殆んど逃亡したが、人数は八十名ぐらひであつた。

その建物を調べてみると、敵の新炭補給所であることが判明した。暗闇のなかでよくわからないが、木炭がぎっしり詰まつた倉庫があつた。盗まれないように封印して、その夜は皆ぐっすりと眠つた。

明くれば14日、前日に引き続き城内掃蕩を行つたが、各隊の顔は見連えるように生き生きている。その日の夕方から夜にかけて、掃蕩残れの敗残兵が苦しまぎれに放火した。これには、さすがの勇士たちも東奔西走、消火にへトへトになった。12時すぎ、やつと一段落して寝ようとしたところへ、また情報が入つた。

「敗残兵が新炭倉庫に放火、目下盛んに燃焼中」というのである。ただちに、中隊長自ら指揮して消火があつたが、火の手が早く寄りつたが、全焼するという事件があつた。

▼野村敏明氏(前出)は次のような私信を寄せられた。
「清水中隊長の城内掃蕩の記録は、素っ気ない記録のように思われるかも知れないが、当時私が大隊本部書記として、第一線

隊内を巡視した際、或る大きな建物を偵察した。空家と思ひ進入して大きな廊下を通り、部屋の扉を開けようとしたが、堅く閉めである。やむなくドアを蹴って強引に開けたところ、部屋の中には中国兵らしい軍服を着たものが五、六百名、寸し結めになっている。入口寄りの下士官らしい者が、毅然として拳手の敬礼をした。私は一瞬ドキッとしたが、受礼の後、右手をもつて一同を押し静めるようにして、中国語で「心配いらない」と言ったら、安心したらしい。長居は無用、手を振りながら早々と退去した。

危機一発のところだったが、この件を速やかに旅団長に報告しようとして帰ったら、旅団長は、南京の住民は温和なので、過激な取扱いをしないように、厳重に注意され、これは各部隊に徹底していた。

わが部隊の城内駐留間、住民は平静で、無事故で転進することができた。

▼4、歩兵第三十五聯隊將兵の証言
野村敏明氏の証言 (第二大隊本部附軍曹のうち中尉、現住所、富山県婦負郡婦中町速星八三六一)

私は当時、歩兵第三十五聯隊第二大隊本部附軍曹として戦闘に参加し、引続いて12日間、南京に滞在した。

中山門正面の敵陣地は、城壁から約千百メートルの線を第一線とし、縦深約三百メートルにわたり三線の陣地を構え、鉄条網を張りめぐらしていたが、兵力は予想外に僅少であった。

大隊は、右から第二、第三、第一中隊の順で攻撃配置につき、12月11日午後2時、第一陣地に突入し、引き続き約一時間半で全陣地を突破して城門に迫った。この間、友軍の戦車が協力にやってきたが、地形が複雑で障礙が多く、地雷が敷設されているため行動を阻まれた。

中山門及びその左右の城壁上の敵も強力ではなかつた。12日夜暗に乗じて、第二中隊が城門に肉薄し、敵の射撃が次第に衰えたの、將校斥候を派遣したところ敵は既にいなくなつた。將校斥候は、そのまま居残り、13日早朝、第二中隊主力が中山門とその周辺を完全に確保したのである。左第一線であった第一中隊の本戦闘における損害は、戦死六、負傷十九と記録されている。

第一線中隊は、引き続き城内に向かって進撃をはじめたが、中央交差点に至るほど中間の地点で「爾後の前進は命令による」と発令されて停止した。これまでの間、市街戦は起これなかつた。そして、12月24日、南京を離れるまで、部隊は同地を動かかなかつた。

私は、大隊本部とともに午前8時頃、中山門から城内に入ったが、途中死体は見なかつた。

私の体験記
「12月13日のちようどその頃、中山門付近の城壁上で、一列に並べられた捕虜が銃剣で刺されて突き落とされていった」のを見た新聞記者がいろいろと尋ねたが、当時そんな噂話を聞いたこともない。

日時は覚えていないが、外出許可がおりて揚子江岸に行ったとき、一新聞記者から、「数日前、この河岸に沢山の死体があつた」ということぐらひである。その時私は、河向こうへ逃げようとして集まつた敵が、日本軍に撃たれたのだらうと思つた。

私が外出中に見た街路は、さっぱりとして人影もなく静かであつた。敵兵の死体も見なかつた。一般住民にも会わなかつた。方々で大掛かりな屠殺行為が行われているといふような気配は感じられなかつた。

洞氏の「批判」について
私は富山県の片田舎に住んでいるが、鈴木明著「南京大屠殺のまぼろし」を読んで、初めて南京戦でおかしな噂が流れていることに驚き、鈴木氏に私の体験記を送つた。これが、作家の山本七平氏の目にとまり、「私の中の日本軍」の中に、N軍曹の記録としてとりあげられ、南京事件の虚構性立証の証拠とされた。

ところが、洞富雄氏が昨年12月『決定版・南京大屠殺』(徳間書店)で、山本説を批判し、「歩兵第三十五聯隊(富士井部隊)が中山門を占領した」というのは嘘である。従つて、N軍曹の記録は信憑性が疑われると主張し、その証拠として「中山門一番乗り大野部隊の万歳」の写真を提示した。

ところが、この写真には中山門が写つておらず、崩れた城壁上に数十名の兵隊が居るだけである。私は、当時上海派遣軍司令官が歩兵第三十五聯隊に授与した感状と聯隊が中山門を進入する写真のコピーを洞氏に送つて反論したが、何の返事もない。

【筆者注】中山門一番乗りが20いか35いかということは、森英生氏(前出)が述べているように、南京事件説明の面からみれば、本質的な問題ではない。また、初め「20か一番乗り」を信じていたた森英生氏が「35か一番乗り」もあり得るのではないかと考へられたように、今日においてはこれを解き明することは困難であらう。

このことは、所謂「体験記・見聞記」なるものから、歴史の真実をつかむことが、いかに難しいかを如実に示していると考えられる。

▼清水真信氏の記録 (歩兵第三十五聯隊第三中隊長)
12月13日午前3時半頃、小出中尉の指揮する小隊は、中山門左側三百メートルの破壊口から突入して城壁を占領し、中隊主力は6時10分に中山門正面より中山門を占領した。城壁上からみると、目の前に飛行場があり、逃げ遅れた敵が見える。午前8時頃になると、友軍が銃々と入城してくるが、見知らぬ部隊の命令により、中隊は再び尖兵となって市内の掃蕩に進発し、まず飛行場を占領したが、敵兵は既に退散して居なかつた。中隊は格納庫を本陣として、広い飛行場の建物をもつ二つ点掃蕩し、さらにクリークの向こう側の市内へと掃蕩の手を伸ばした。そして、クリークを渡つた向こう側の街で13日の夜を迎えた。その夜は、部隊命令で民家に宿営したが、各方面と連絡をとり警戒部署を定めて、やつと午後10時すぎに夕食をとつた。

このとき、約百メートル離れた工場らしい建物の中に、敵兵が数百名かくれているとの報告があつた。それと、その工場らしい建物を包囲して、間の中で掃蕩戦をはじめた。敵は手榴弾を盛んに投げつけてきたが、それも次第におさまり、30分後には全く沈静した。敵兵は殆んど逃亡したが、人数は八十名ぐらひであつた。

その建物を調べてみると、敵の新炭補給所であることが判明した。暗闇のなかでよくわからないが、木炭がぎっしり詰まつた倉庫があつた。盗まれないように封印して、その夜は皆ぐっすりと眠つた。

明くれば14日、前日に引き続き城内掃蕩を行つたが、各隊の顔は見連えるように生き生きている。その日の夕方から夜にかけて、掃蕩残れの敗残兵が苦しまぎれに放火した。これには、さすがの勇士たちも東奔西走、消火にへトへトになった。12時すぎ、やつと一段落して寝ようとしたところへ、また情報が入つた。

「敗残兵が新炭倉庫に放火、目下盛んに燃焼中」というのである。ただちに、中隊長自ら指揮して消火があつたが、火の手が早く寄りつたが、全焼するという事件があつた。

▼野村敏明氏(前出)は次のような私信を寄せられた。
「清水中隊長の城内掃蕩の記録は、素っ気ない記録のように思われるかも知れないが、当時私が大隊本部書記として、第一線

後と記憶している。問題の「残虐事件」を世界に流したマンチェスター、ガーディアン紙の記者ティンパリーは、南京陥落直後、結婚のため帰国したいというので、日高氏が軍とかけ合いつい何とか出国証明をとって帰国させた。このとき持ち出した資料をもとにして「中国における日本軍の残虐行為」を発表したと思われる。

当時、私は毎日のように外国人が組織した国際委員会の事務所に出掛けていた。そこへ中国人が次から次へと、かけ込んでくる。「いま、上海路何号で十歳ぐらいの少女が五人の日本兵に強姦されている」あるいは、「八十歳ぐらいの老婆が強姦された」等。

その訴えを、フィッチ神父が私の目の前で、どんなタイプしている。私は「チップト待ってくれ。君たちは検証もせずに、それを記録するのか」と、彼らを連れて現場に行ってみると、何もなし。住んでいる者も居ない。

また、早朝に米国外使館から抗議があった。下関にある米国人所有の木材を、日本軍が盗み出しているという通報があった。ただちに、雪の降るなかを、本郷忠夫参謀と米国外使館員を連れて行くと、その形跡はない。とにかく、こんな訴えが連日山のように来た。

ティンパリーの原資料は、フィッチが現場を見ずにタイプした報告と考えられる。……安全区の難民の中に便衣兵がまじっていたことは事実で、日本軍が或る家を検索したら、天井から鉄砲がゴッソリ出てきたこともあった。事件は戦場という異常な状況が生んだ、異常な出来事といえよう。東京裁判でマギー神父は、街路に死体がゴッソリしていたと証言しているが、このような情景はついぞ見たことがない。タリ

ークに浮かぶ死体は見たことはあった。また、マギー証言では「12月18日、日本大使館の田中領事と同行して……」といっているが、田中領事といえは田中正一氏のことであるが、彼は陥落一ヵ月後ぐらいに漢口から来た人だ。証言にある12月18日には、南京に居なかつた。着任後もそんな話を聞いたことはなかつた。

ただ、各国の大使館がかなり荒らされていて、これには困った。日本軍によるものか、中国軍が退却にあたり狼藉したものか判らないが、二日間寝ずに整備した。盗まれたオートバイや自動車も弁償したりしてえらい苦勞をした。軍の中には、強姦している兵隊を見つけて、軍刀が曲るほど殴りつけた参謀もあつたという……」

◆東京裁判「中国側証言」の真偽

東京裁判に出廷した伍長徳氏、梁廷芳大尉、尚徳義氏、金陵大学教授ベーツ博士、ミス教授などの陳述書、あるいは孫永成氏、汪良氏の告発記、新島淳良氏の伝聞記事などによって、難民区での暴虐行為が報じられていく。その中の若干を引用して、その信憑性をさぐってみよう。

○漢西門外の虐殺説は真実か

伍長徳氏の口供書 「私は当時警察官をしていたが、南京陥落後、武器全部を安全委員会に引き渡して、難民収容所となっていた司法部の建物に入った。そこには一般の民衆も多数いたが、15日、日本兵がやってきて、この収容所のすべての者を西大門に行き進めた。日本兵は、われわれが門に着くと、百人以上を一回とし、十六回を順次、門外に押し出して射殺した。自分は機関銃が発射される寸前に、うつ伏せになったところを銃剣で背を刺されたが、致命傷でなかつたので、死を装って危く生還することができた。惨殺者数は二〇〇〇余名」 汪良氏が中国帰還者連絡会訪中団に話し

た話。 「漢西門外の砂地では、毎日幾百多いたは幾千人の人びとが、城内から連れ出され集団で銃殺されました。たつた一人の生き残りに段有余さんという証人が現在も生きています……」

新島淳良氏が聞いた話 「数回に分けて数万人が土中に埋められて窒息死した。そのとき、生き残った伍長徳さんは、のちに東京裁判の証人に立っている。」

(1) 三者の証言はゴックとした部分が食い違う。たつた一人の生き残りという段有余さん以外に伍長徳氏も生き残っている。殺害の方法も、一方は機関銃であり、他方は生き埋めという。それも数万人の生き埋めである。

(2) 平本渥氏の証言(前出)によると、13日夕刻、司法院の中に多数の難民を見ているが、14日16日にわたる掃蕩に従った参戦者の証言では、司法院から二千人を拉致して漢西門外で殺害した事実はずかぬ。ただ、戦車第一中隊本部の草場軍曹が、14日、漢西門外で敵の正規兵八十名余りの銃殺場面を目撃して、この司法院には入城後、独立軽装甲車第七中隊が宿営したが無人で、屋内は荒らされておらなかつたという。

(3) 13日城内に進入した歩兵第二十三聯隊第二大隊は五台山近くまで前進後、引き下がって水西門内に駐留し、歩兵第四十五聯隊第二大隊は水西門外付近に15日21日まで宿営しているが、坂元氏および成友氏の証言(前出)をみると、二千人もの大虐殺の事実とは認められない。

○梁廷芳大尉の重撃口供書への疑問

「私は便衣に着かえて、安全区の難民収容所にかくれていた。16日午後5時ごろ、日本軍に下関に赴くように命ぜられ、五〇〇〇名ばかりの者と、四分の三マイルにも及ぶ行列を組んで引き連れて行かれた。危うく殺されるところであった。この射殺は五

人ずつ後ろ手に縛り、揚子江岸にならべて機関銃で射撃したが、日本軍の将校以下約八百人が居合わせていた。私は午後11時頃、日本兵の眼を盗んで友人とともに揚子江に飛び込み、崖下にかくれて助かった。射殺は翌日午前2時まで続いた。」 (ゴック・筆者)

(1) この収容所から五千人を拉致し、どの道を通り、下関のどこで銃殺されたのであるか。

(2) 非兵第七聯隊は、16日にはじめて難民区内の収容所の検索を、憲兵立合のもとに実施している。また、把江門の城内には歩兵第三十三聯隊が駐留し、掃蕩は14日に殆ど終了している。兩聯隊の将兵は、五千人もの大虐殺について、何も語っていない、記録もない。

(3) 五人ずつ後ろ手に縛り、機関銃で射殺したというが、五千人を縛るのも大変であるが、機関銃の夜間射撃設備も困難である。水面に映じたあかりを頼りの「闇夜の鉄砲」、しかも、八百人の目撃者と言え、約一〇大隊の将兵が見物していたのであろうか。翌17日は入城式である。将兵たちは、城内掃蕩を終え、破壊を免れた建物の中で寒夜をしをく暖をとっていたはずだが、梁大尉は揚子江に飛び込んで助かったというが、厳寒の最中、しかも深夜である。よく助かったものだ。 未完

会員の声

「偕行」8月号の「証言南京戦史」のなかで、軍参謀・長中佐が強硬に主張したとも「降伏を受け入れぬ」の命令について、吉田昇一氏(52期、広島市在住)より、厳しい電話をいただいた。要旨は次のとおり。 「この記事は大きな関心をもって読んでいますが、長中佐や中島師団長が、こんな暴命を出したのは事実ですか。もし松井大将の意志に背いて、このような命令を出した

支那の国家としての長期抵抗力を決定するもの(の)第一は支那の民族抗戦を指導する指導部、国民党及び共産党の合作の問題である。その結合の堅さ如何といふことである。

国共合作の将来については戦争の初期に於て分裂の可能性が強調せられたとの反対にこの頃では両者の合作の永久性を説く者が多くなつて来たやうに見受けられる。

国共両党の真意は今日と雖も目前の戦略的考慮に基づいて提携しつゝあるという事実は否定出来ないから分裂は将来起り得ないと見ることは誤りであらうが、それにしてもかゝる分裂の生じるためには余程大きな事情の変化を必要とするに違ひないのである。

▲尾崎秀実「現代支那批判」昭和13年11月刊 中央公論社 定価一円七十銭

▲方法論の欠如

日本に於いて今日憂ふべきは、支那研究の不足ではない。寧ろ支那に関する個々の知識については、多過ぎる位存在してゐるのである。真に問題とすべき点は、支那研究における方法論の欠如といふ点にある。

▲尾崎秀実「国際関係から見た支那」昭和12年9月・第二国民会出版部

▲尾崎と中国共産党

尾崎と中国共産党の間には明かに密接な関係があったが、当時私はそれについてほとんど知らなかつたのである。

尾崎が中国共産党と密接な関係にあることが、もし私に判つていたら、私は彼とあんなに密接な関係になるのを躊躇したに違ひない。そして、多分尾崎を使う考えを捨てたことだろう。

私は、中国共産党とは直接に接触しないよりにモスクワから敵命されていた……。(リヒアルド・ゾルゲの日記)

▲延安への使者

(19年)9月ごろ、小磯内閣が重大な局面を開閉するため、中国共産党首脳部と妥協の交渉をする必要を感じて、内務大臣児玉秀雄らが、鍋山貞親か佐野学を、日本政府の特使として、ひそかに延安に派遣しようとする計画してゐる、という情報が伝わってきたとき、

ある知名の人物は陸軍次官(柴山兼四郎?)に會つて、「共産主義から転向した鍋山君を延安工作に使つてゐるそうだが、なぜ尾崎を使わないのか。鍋山君ではできなくても、尾崎なら話ができるのではないかと。その尾崎をいままつて措置所にはおきこんでおくのは、いったいどうしたことか」と進言した。

これに対して陸軍次官は、かならずしも一蹴せず、「なにかきみのほうに案があるか。尾崎を働かせるような方法を考へておけ」と答へてゐる。

▲風間道太郎「尾崎秀実伝」法政大学出版局・風間は尾崎の一高時代からの親友であつて、本書は尾崎伝記の白眉とされる。

▲竜の頭

南京の陥落後政府が西遷しても浙江財閥は上海の繁栄が思い切れずなかなか奥地に入らうとしなかつた。上海工場の奥地移転がしきりに宣伝されたが、一九三八年の終りまでに實際奥地に移つた工場数は全体の一割にみたなかつた。蔣政権が浙江財閥を上海に残して奥地に入る心細さは財布を忘れて旅行する人の悩みに近い。上海に残つた浙江財閥の中には「抗戦到底」は現実にはそぐわない空論だと考へるものもあつた。

そのうえ彼等に対して大きな影響力をもつてゐる英國も外交政策に大きな転換が行われた。一九三八年二月には対軸強硬派のイーデンが辭職して以来、英國の極東政策は急速に軟化し、上海海関を日本側に引き渡し、蔣介石の懇請した二千万ドルの借款を拒絶した。

蔣政権にこの情勢が反映しないわけはない。中国政府の内には和戦問題をめぐつて激烈な討論が起つてきた。

和平論が若し上海の資本家の敗北主義の反映であるとすれば、南京政府が彼等の影響力を直接にうけない重慶に移つたことは抗戦中国にとつてたしかに大きなプラスでなければならぬ。

外国の一批評家はこの関係をこんな風に述べてゐる。中国の國の象徴は竜であるが、竜は巨大な蛇の様なもので頭をおさえなければ捉まるまじ。中国の竜の頭が南京にある間に日本がこれと和平を結ぶことに失敗すれば恐らく永久にその機会はあり得ないのだ。竜の頭が重慶に行つて了つた以上日本がいくらその尾をたたくだけである。

日本の軍部は重慶遷都は南京政府の地方政權化だと言つたが、寧ろそれは浙江地方政權を脱皮して全國民的政權に一歩近づいたことなのである。

この変化は政治面にも明らかに反映してゐる。一九三八年二月陳誠を部長として設置された軍事委員會政治部には中共の周恩来が副部長として就任し、人民戦線派の郭沫若が第三厅长として就任してゐる。その下に働く人員の多くは上海、南京から逃亡してきた光華、大夏、復旦大学の学生で、思想的には左翼のものが多かつた。

武漢陥落の日まで続くこの時代は国共合作が抗戦史上最も順調に進んだ時代だ。中共の勢力は国共合作によつて開かれた大道を通じて無限に進展してゆくかに見えた。

▲吉田東祐「周仏海日記」序文より

【注】吉田東祐本名・鹿島宗二郎、南京陥落後、在上海・小野寺機関(長・支那派遣軍參謀、小野寺信中佐31期)のちスウェーデン大使館附武官・少将、東京世田谷に健

在)に属して重慶との和平工作に従う。戦後國士館大学教授、昭和56年没。
なお、「小野寺工作」に関しては吉田東祐著「上海無辺」、宇都宮直賢氏33期の回想録「黄河・揚子江・珠江」が詳しく、当時上海憲兵隊に在動した、塚本誠氏36期の「ある情報技校の記録」(芙蓉書房)にも、なまなましい現地のレポートが記述されてゐる。

▲妥協を排す

中共に対しては、あらゆる妥協を排し、すべてに徹底した対抗策を講ずることが必要なのである。

中共の理念から言えば、日本軍が中国から完全撤退するまで戦うことであつた。従つて日本側が中共と一時交渉を試みようとしたら、あるいは中共を押える力もない重慶政府との交渉、妥協を図つたりしたことは、もし交渉が整つたとしても、それは一時的な糊塗に過ぎず、防共の目的は到底達せられなかつたであらう。

▲公刊戦史「北支の治安戦(2)」572ページ

投稿

「南京事件」の数値的虚構

48期 犬飼総一郎

▲はじめに
まず「南京事件」なるものについては、物理的に不可能な数字ばかりでなく、虚構という形容についてもふれなければならぬ。

当時、私たちが確かに耳にしたのは、山西省で無残な殺戮をした日本軍の工兵中隊の話であつた。それはかの「通州事件」に劣らぬ残酷さだつたと聞く。

私は見聞しなかつたが、南京で一部の心ない将兵が中国市民を殺害したことはあつたかも知れず、あつたとすれば率直に認めるべきであらう。そうしてこそ、大虐殺の虚構をつきすすことができる。

そこで本論に入るに先だち、われわれが自